

敷居を越える 都市の形象たちにおける「想起 (Eingedenken)」

山口裕之

1 遊歩

ある都市の中を歩くということは、異なる時間や空間が層をなして織り込まれたさまざまな形象を身体で感じ取り、その記憶や意味連関の重層的なテクスチャーの中へと入り込んでゆくことである。「街道を歩いてゆか、飛行機でそのうえを飛ぶかによつて、街道の發揮する力は異なる。同様に、テキストを読むか、それを書き写すかによつて、テキストの發揮する力は異なる。空を飛ぶ者に見えるのは、道が風景のなかを進んでゆくさまでであり、彼の目には、道はまわりの地勢と同じ法則に従つて線り広げられてゆく。道を歩いてゆく者だけが、道の支配力を知る。そして、飛行者にとつては単に伸べ広がった平野にすぎない、まさにあの地形に、道が号令をかけて、遠景や、見晴らし台や、林間の空き地や、すばらしい眺望を、道の曲がりくねりごとに呼び出すさまは、ちょうど指揮官が兵士たちを前線から召喚するのに似ているが、そうしたさまを経験するの、歩いてゆく者だけである。同じように、書き写されたテキストだけが、それに取り組む者の魂に号令をかけるのであり、それに対し、単なる読者は、自分の内面の新しい眺めを決して知ることがない。そうした眺めをテキストは、つまり密になつてはまた疎らになる内面の原始林を通るあの道は、切り開くはずなのだ。」¹ テキストを上空から俯瞰するのではなく、そのうちに沈潜して、言葉の林の中でしつとりと濡れた小道を踏み

しめながらそれらの木々の一つ二つに触れ、ある言葉がその地勢の中で他の言葉たちとどのような連関のうちにあり、どのような支配圏をもっているかを感じ取る、というきわめて触感的な経験は、都市に対しては、おそらくテキストに対する以上に稀なものではなからうか。都市の中を歩くということとは、そこで出会う建物、あるいはその特定の一部、看板、シヨウウィンドウ、街路といった形象たち、またそういった形象たちによつて形作られる都市全体の空間的存在のうちに重層化された歴史を感じ取ること、それらの形象たちの支配圏を身体で感じ取ることである。少なくとも、文字によつて書かれた都市——『ベルリンの幼年時代』や『二方通行路』のベルリン、ボードレールを通じて、パサージュを通じて描き出そうとしていたパリ——は、ベンヤミンにとつてそのような都市とテキストへの、あるいはさらにそこに重ね合わされた歴史や構造化への触感的な沈潜そのものである。

確かにベンヤミンのようなアレゴリカーのまなざしは、都市の形象たちを、都市のうちに配されたアレゴリーとしてとらえる。つまり、それ自体特定の事物でありながら、あるまったく別な事物を指し示し、それによつて異なる意味連関をもつものとして。その意味の重層性には異なつた時代が織り込まれ、そのようにして二つの形象のうちに歴史が空間化されたものとして。他の事物とは切り離され、基本的には断片として存在す

るものとして。しかしながら、ある構造的な布置・星座(Konstellation)の中へとあらたに組み込まれることによって、再びある一つの全体像の形成に与り、そのようにして救済されることを待ち望むものとして。² ベンヤミンにとつて、ボードレールが韻文のテキストのうちに定着させた「近代」のパリの像は——とりわけ、バロックの廃墟に見られる瓦礫の断片のような「脆さ・かよわさ」を通じて——「古典古代」と重なり合っている。「メリヨンについて論じながら、ボードレールは近代に熱中している。しかし彼が熱中しているのは、近代の中の古典古代の相貌である。というのも、メリヨンにおいても古典古代と近代が相互に浸透し合っているからだ。また、メリヨンにおいてもこのディゾルヴの形式、すなわちアレゴリーが見まがいようもなく立ち現れているからだ。」³ ベンヤミンが「ディゾルヴ(Überblendung)」という映画のタムを用いて表現しようとした、アレゴリーにおける形象・イメージの二重性は、彼が都市の中の事物をとらえるときのまなざしにおいて決定的なものである。ベンヤミンにとつてアレゴリーは、弁証法的な両極を二つの空間的形象のうちに重ね合わせているというその「二義性」のゆえに、新たな段階への「転換」を可能にする力を胚胎するものである。『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』によってベンヤミンが提示しようとしたのは、このようなアレゴリー——「近代」の都市パリの具体的形象であるとともに、ボードレールの詩の中に現れるアレゴリーでもある——がどのような革命的起爆力を秘めているかであった。ベンヤミンはそこで、革命的な力を帯びた言葉(アレゴリー)を都市のうちに／詩のうちに配する「プッチスト」としてボードレールを描き出すが、⁴ ここにもまた言葉と都市の際立つて美しいアナロジーを見ることができるとができる。

あるいはまた、このようなアレゴリカーのまなざしは、ある個人の記憶(さらには「集団的記憶」にまで敷衍されることにもなるが)における二重性となつてテキストのうちに定着する。そういったまなざしは、ベンヤミン自身の幼年時代の記憶を直接の素材とする『一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代』において見られるだけではない。『二方通行路』の中で一九二〇年代半ばのベンヤミンがとらえた、アレゴリー的な標題によって示される同時代の都市の形象たちは、しばしばベンヤミンの深く埋められた記憶がそのまま形象化されたものでもある。

私たちの人生という家が建てられるに際して行われた儀式を、私たちはとうの昔に忘れてしまっている。だがこの家が攻撃されようとするとき、そして敵の爆弾がすでに落ちてきているとき、ぼろぼろになった奇妙な古物がひとつ残らず、それらの爆弾によつて、土台の中に露わにされてくるではないか。すべては呪文とともに埋められ、犠牲として捧げられたものではなかったか。あの下のはうは、なんと身の毛もよだつような珍品陳列室であることか。そこでは、最も日常的なものに、いちばん深い堅穴がとつておかれている。ある絶望の夜、夢の中で私は、もう何十年も消息を知らず、この間、思い出すこともほとんどなかった学校時代の最初の級友と、友情を、そして兄弟のような愛情を、嵐のごとく、新たに結んだ。だが目覚めたとき、はつきりと分かった——絶望が爆発のように白日のもとに晒したのは、この人の遺骸だったのであり、それが塗り込められていたのは、将来ここに住む者が、いかなる点においても彼に似ないようにするためだった、ということ。⁵

都市の中でごく普通に目にする「半地下 (Souterrain)」——外から見ると、多くの場合、街路に面して足元付近(内部では天井付近)に採光窓をもつ住居の下層部分——が、この短いテキストの標題として、『二方通行路』の中で取り上げられる他の多くの形象たちとともに、それ自体としては都市の風景の中の二つとしてこの場所に収まっている。そのようなものとして、Souterrainという文字ではなく、その写真がそこに収まっているにもかかわらずだろう。その形象・イメージが指し示しているのは、自殺した学生時代の親友の記憶、その衝撃のために文字通り地下に埋められたものの、あるとき「爆撃」によって白日のもとに晒されることとなった記憶である。あるいは、意識という表層部分の地下に埋めるという行為とそれを何かのはずみで掘り起こす行為そのものの構造的性、そしてそういった行為の上にまさに建てられた生活という構造的性そのものといったほうがよいかもしれない。そのイメージは、単なる個人の記憶を越えて、このテキストを読む者——この形象を通じてそれが指し示す記憶・忘却そのものへとたどり着く者——を震撼させる。それは、この形象によって表象されるものが、単に特定の個人の体験に関わるだけでなく、ある構造的性そのものの像となっているからである。ベンヤミンがベルリンの市街で出会うさまざまな形象は、それぞれ断片として何の脈絡もなく存在しながら、このように記憶のなかで連鎖していく。あるいはまたそういった記憶の連関とともに、例えば「ガソリンスタンド」や「公認会計士」といった小編に見られるように、都市の形象たちはベンヤミンのとらえるメディアのパラダイム転換の理論連関とも意味の重層性をもつて共振し合い、ある新たな像へと組み込まれていくことになるのである。⁶

2 敷居

アレゴリーとしての(あるいはアレゴリーが配された)「近代」の都市に埋められた「古典古代」を二重写しのように浮かび上がらせるにせよ、忘れ去られた記憶を地下から呼び起こすにせよ、ベンヤミンにとって都市を歩くという行為は、時間や記憶の地層のうちに埋められたある歴史的的形象を掘り起こす、いわば考古学的なまなざしをともなっている。しかし、都市をとらえるベンヤミンの視線には、こういった形象・イメージのいわば同時的・垂直的な二重性だけでなく、この二重性に関わるもうひとつ別の、ある根本的な思考様式を認めることができる。それは、ある展開の中で、異なる領域へのいわば水平的な移行である。ベンヤミンのテキストには、これら同時的な二重性の境界、および展開の中での異なる段階の間の境界——これらをベンヤミンはしばしば「敷居 (Schwelle)」という言葉で呼んでいる——を越えることをめぐる、きわめて細やかな感受性をともなった反省が支配している。(この小論は、都市について語るベンヤミンのテキストの、アレゴリーをめぐる思考連関、記憶をめぐる思考連関、「敷居」をめぐる思考連関、そして歴史をめぐる思考連関を結びつける試みと位置づけることができるだろう。⁷)

ベンヤミンは、例えば『凱旋行進と凱旋門』と題されたフェルディナン・ト・ノアクの論文からインスピレーションを得て、⁸ 凱旋門を「祭儀的意義」をもち、「通過儀礼」が行われる場としてとらえていく。「門は、敷居という経験領域からさらに発展して、そのアーチをくぐる人物までも変えるにいたる。帰国してきた軍司令官がローマの凱旋門をくぐれば、凱旋將軍ができ上がるというわけである。」⁹ ここで問題となっているのは、例えばノアクが彼の論文の中で意図したような、凱旋門の歴史的機能で

はなく、都市の中に、ある異なる世界に通ずる入り口となる場所が存在するということ、異なる世界に足を踏み入れるというある根本的な経験の場が、凱旋門といった特別な意義を持つ建築物に限らず、あらゆる門や入り口あるいは階段の始まりといった、都市の中の具体的形象となつて現れているということである。「夢の中を別とすれば、それぞれの都市においてほど境界という現象がそれ本来の姿で経験されうる場所はほかにない(…)境界は敷居のように街路の上を走っている。そこからは、虚空へ一歩踏み出してしまったときのように、ある新たな区域が始まるのである。まるで、見えていなかった低い階段に足を踏み出してしまってもしたかのよう」に。¹⁰ 都市の中で境界の機能を持つそれらの形象は、多くの場合——実際、建物の敷居がそうであるように——まさにそのような空間的形態によつて特徴づけられるものとなつていよう。しかし、そういった境界を越えることによる変化は、日常的な経験の中に埋没することによつて、おそらくほとんどそのようなものとして意識されることはない。というよりも、それはその境界が本来意図している空間的機能の変化として、自明なものと受け取られることになるのだらう。扉は、ある建築物において異なる空間機能の間の境界をなすものであり、それを通つてゆくことにより異なる機能・意味を持つ空間に入り込んでゆく。しかし、ベンヤミンにとつて敷居を越えるということは、そういった単純な空間的移動、異なる機能連関を持つ空間への移動を表しているだけではなく、むしろある異なる層へと入り込んでゆくこと、われわれが今ここにいると感じ、その意味で「現実」ととらえているこの世界とは異なる世界へと入り込んでゆくことに重なり合っている。

その異なる世界は、空間的な比喻としては——前の引用で下に降りて

ゆく階段によつて現されていたように——しばしば、われわれのこの世界の「下」にあるもの、そしてその意味で光の届かない暗い世界としてイメージされている。「古代ギリシアでは、黄泉の国 (Unterwelt) に通じているいくつかの場所があるとされていた。覚醒時のわれわれの存在にしても、そのさまざまな秘密の場所から黄泉の国へと道が通じている一つの大地、夢が流れ込んでくるまったく人目につかない場所に満ちた一つの大地のようなものである。われわれはそうした場所の傍らを毎日それとも知らず通り過ぎていくのだが、しかしひとたび眠りが襲つてくると、そうした場所を取り戻そうとあわてて手探りし、暗い道に紛れ込む。町の家々の作りなす迷宮は、白昼についていえば、意識に似ている」¹¹ 敷居は、『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』においては「近代」のパリに埋もれた(まさに「地下的・冥界的 (chthonisch)」¹² という言葉によつて言い表されている)「古典古代」の相貌を浮かび上がらせることの、そして昼間の意識の下に埋められた隠れた記憶を掘り起こすことの、いわば秘密の入り口である。二つの世界の重ね合わせ、異なる世界の発掘は、敷居を越えることによつて初めて可能となる。白昼の意識において——つまりわれわれの「現実」感覚において——とらえられる都市に対して、昼のあいだは意識の「下」に隠された、いわば夢の中の都市が重なり合うように存在する。「夢——それは一九世紀の根源史 (Urgeschichte) について証言してくれるような発掘が行われる大地である」¹³ それはまた「目覚め」を待つ都市でもあるのだが、その意味においても「近代」のパリが「夢の都市」と呼ばれることになる。

ヴァインフリート・メニングハウスは、ベンヤミンのパリやベルリンについての著作だけでなく、それらに比べれば比較的省みられることのない短い旅

行記についても、「敷居」の感覚がいかにベンヤミンの思考を貫いているかを強調している。「二度ベンヤミンの敷居の強迫観念^{オプセッショ}に対して注意が研ぎ澄まされると、それは彼の他の都市観相学を見ても同じように目を惹く。」¹⁴

この「オブセッション」はベンヤミンのテキストのいたるところに浸透している。いったんベンヤミンの敷居に対する感覚を身体で感じ取ったならば、門、扉、敷居、階段といった明らかにひとつの境界を形づくる形象がテキストの中に現れてきたときだけでなく、例えばロッジア、電話、クリスマスツリーなど都市の中で出会うごく普通の物たち、あるいは朝食を食べること、病気になること、動物に触れることといった日常的な経験にベンヤミンのテキストの中で出会うたびごとに、それらがいかに深く「敷居」をめぐる連関のうちに組み込まれ描かれているかを確認することになるだろう。さらには「敷居」が、そういった都市の中の事物や経験を離れて、例えば「目覚めと眠りの間にある敷居」（『シュルレアリスム』）、¹⁵「世界審判という敷居」（『カール・クラウス』）¹⁶として、ベンヤミンの思考形式の中に深い根を下ろしているさまに出会うことになるだろう。境界をめぐる思考連関がとりわけ都市について語るテキストにおいて問題となってくるのは、いうまでもなく都市空間こそが、境界という本来的には空間的な形式の集中的に現象する場所であり、「夢の中を別とすれば、それぞれの都市においてほど境界という現象がそれ本来の姿で経験されうる場所はほかにない」からである。

このことは、シュルレアリスム論やクラウス論に見られるように、「敷居」が二つの意味世界の間の論理的な構造関係の境界として現れる場合にもその痕跡を残している。ベンヤミンがゲーテの『親和力』を語るにせよ、カール・クラウスについて語るにせよ、カフカについて語るにせよ、¹⁷

そこに現れる「敷居」によって隔てられる二つの世界の論理的な構造関係は——敷居が一つの具体的な空間的形象である以上自明のことかもしれないが——空間的なイメージの比喻によって語られることになる。というよりも、アクセントを置き換えて考えるほうがふさわしいだろう。ベンヤミンにおいて決定的であるのは、異なる層の論理的な構造関係をその表現のうちにどのように配置しているかということである。ベンヤミンがまさに都市について語るテキストの中で述べているように、「考えられた通りに表現された真理ほど貧しいものはない」。¹⁸都市の中のさまざまな形象、都市空間の中の敷居は、そういった構造関係にかかわるアレゴリーとして配置されている。といつてもそれは、都市の中の形象がある論理的関係の中で単に比喩像として機能しているということではない。形象は、それ自体とは別の意味連関を同時に指し示すアレゴリーとして本来的に二重の意味連関の層にかかわり、また、罪の連関にとらわれたアレゴリーとして、時間性が空間化された「自然史」として、それ自体、いわば次の層において「救済」されることを志向している。¹⁹その意味において都市空間は、ベンヤミンの思考形式そのものの表現でもあるのだ。

そういった都市の形象の中で、敷居は論理的な構造関係を支える形式に直接関わっている。その意味で、ベンヤミンが敷居をめぐる思考形式に対して「敷居学(Schwelkenkunde)」²⁰という名称を与えていることは、——もちろんきわめて奇異な名称ではあるけれども——もつともなことであるともいえる。『パサーージュ論』においてベンヤミンが「敷居学」という言葉を直接用いている箇所であれられているのは、ゴッティエの著作からの、それ自体としてはごく些細なものとも見える引用にすぎない。「ある歩く哲学者によれば、パリで、歩く人と馬車に乗る人との間には、ステップに足が

掛かるか掛からないか、それだけの差しかないのである。ああ！ ステツプ……それは、ある国から別の国への、貧困から豪奢への、呑気な暮らしから気の張る生活への出発点であり、無に等しい人からすべてであるような人への橋渡しである。問題は、そこに足を置くことだ。」²¹ ここでも、

二つの世界の境界に関するごく日常的に観察される現象が理論的考察のための出発点に置かれているわけだが、ベンヤミンが、一貫してある理論的枠組みに従いながらも、このように現象そのものの提示を彼の表現のスタイルとしているのは、もちろん現象の世界の中で断片として存在する形象たちをアレゴリーとして新たに布置するという彼の思考の方法に由来する。しかし、そのことによって同時に目指されているのは、そのようにしてこの現象の世界、空間性・時間性によって規定されるこの「歴史」の世界、墮罪によって罪の連関にあるこの世界を——ベンヤミンにとってアレゴリーはそういった罪の連関が形象化されたものでもある——理念の世界のうちに、いわば無空間的・無時間的な神の世界のうちに救済することである。

敷居を越えることの二つの形式連関をもう一度確認しておこう。ひとつはアレゴリーがそれ本来の事物としての意味とともに、別な意味を指し示すという「二義性」である。このことは都市の中の形象における意味の重層性として現れる。そのようにして「近代」のパリの姿は「古典古代」に重ねあわされる。ボードレールにとつての、そしてベンヤミンにとつてのアレゴリーであり、「脆さ」「かよわさ」によって特徴づけられる「白鳥」や、²² ユゴーがとらえた「凱旋門」、メリヨンがエッチングで描き出した「ポン・ヌフ」は、この二つの世界の橋渡しとなる形象と云ってよいだろう。あるいはまた、都市は夢の世界——覚醒時には意識の下に埋められた世界——とも重ねあわされている。その世界に降りて行く敷居は都市の中にいくつ

かあるのだが、「われわれはそうした場所の傍らを毎日それとも知らず通りすぎている」。『方通行路』や『ベルリンの幼年時代』のいくつかの小編に描かれているのは、そのような敷居を越える経験である。

こういったアレゴリーにおける意味の重層性に対して、敷居を越えることの持つもう一つの連関は、まさにアレゴリーの展開に関わっている。ある理念的でユートピア的な世界を起点としながらも、そこからの離反による否定性の状態を経て、根源的な状態と結びついたある新しい到達点へといたる、という三段階的な思考のあり方は、ベンヤミンにおいては、理念論（プラトン、ライプニッツ）、ユダヤ神学、歴史哲学、そして三〇年代にはマルクス主義といった、それぞれ基本的には三段階的な展開としてとらえられる思考が複合的に重なり合って形成されている。²³ そこではわれわれの

この世界は、（ベンヤミンの場合、単なる「衰亡の時代」とみなされるのではないにせよ）否定性の徴を帯びた段階として位置づけられることになる。それぞれが完全性・全体としての理念の断片であるにすぎない、この世界におけるさまざまな現象として存在しているものは、同時に、墮罪によって神のもとから追放され罪の連関につきまとわれた被造物でもある。この現象の世界における事物のうち、とりわけアレゴリーは、文化史的にもキリスト教にとつての異教的なものを含むことによつて、また始原のユートピア的言語の直接性から離反し、記号的にある別のものを意味するという「言語精神の墮罪」²⁴ のうちにあることによつて、何重にも罪の圏内にとらわれているのだが、他方で、それ自体とともに別のものを意味するというまさにその特質（「二義性」）によつて、アレゴリーは同時に救済の連関のうちにとらえられることにもなる。というのも、アレゴリーはその空間的形象のうちに本来的存在と記号的な意味連関（本来性からの離

反としての墮罪」という弁証法的な両極を含み持つことによって、ある新たな段階をそれ自体志向しているからだ。弁証法的な両極として位置づけられているアレゴリーの二義性はまた、本来性からの「滅び・衰退」という時間的過程がいわば凝縮され（このことが「かよわさ」「脆さ」となつて現れる）、アレゴリーのうちに空間化されたものでもある。ベンヤミンが「自然史(Naturgeschichte)」と呼ぶ、「自然」の空間のうちに「歴史」の時間の流れがいわば凝固した形象(アレゴリー)のあり方は、無時間的・無空間的な神の世界から追放され、時間と空間という形式の中で事物が存在していくこの「歴史」の世界にありながら、この罪の世界のうちにある被造物が再び神の世界の中に救済されることを志向しているのである。

こういった展開において、図式的には三つの審級が考えられている以上、そこには二つの敷居が存在することになるだろう。一つは、理念の世界、神の世界からわれわれのこの世界へと越える途上にある敷居であり——例えば「言語精神の墮罪」や、神学的・歴史哲学的連関におけるアレゴリーの成立、広い意味での「神話」の連関の誕生——、そしてもう一つはわれわれのこの世界からの救済の連関に関わるものである。ベンヤミンが、言語の墮罪の連関、『暴力批判論』や『ドイツ悲劇の根源』で神話の連関について語るとき、あるいはアレゴリーを特徴的な表現様式とした二七世紀のドイツ・バロックの世界、一九世紀「高度資本主義」のパリにおける商品世界について語るとき、あるいは夢の迷宮に重ね合わされた都市、記憶の中の都市について語るとき、彼はわれわれのこの現象の世界、「歴史」のうちにある世界、罪にとらわれた世界がどのような世界であるのかを語りつつ、つねにこの二つの敷居のそれぞれの彼方を念頭においているといつてよいだろう。こういった二つの敷居のうち、二〇年代後半以降のベンヤミンの

テキストにおいてアクセントが置かれているのは——先にあげた「覚醒と眠りの間にある敷居」や「世界審判という敷居」にしてもそうだが——特に後者の、救済に関わる敷居であるように思われる。というのも、もともとわれわれにとつて問題となるのは、一つには、この現象の世界、歴史の世界、罪の世界のうちにあるわれわれ被造物が、どのようにして救済された世界のうちにもたらされることになるか、ということだからである。しかしそれとともに、ユダヤ主義にとつて本来描くことのできない救済された後のヴィジョンが——例えばカフカにおいては、この歪められ不潔さに満ちた世界の中で、救済を求めながらも、それはさらに極端に歪められ、ずらされて、限りなく引き延ばされてゆくのに対して——この時代にベンヤミンがとつたマルクス主義的方向と重ね合わされることによって、その方向での一定度の比較的明確な像を結んでゆくことになるからだ。

都市を語るベンヤミンのテキストの中に現れる「敷居」は(明示的でないものも含めて)、このようにして、しばしば「目覚め」と呼ばれるような、マルクス主義的色彩を帯びた「救済」に結びついている。しかし、そうであるとするならば、その敷居は、われわれが「そうした場所の傍らを毎日それとも知らず通りすぎている」として、それに気づいたときにも、(意味の重層性に関わる場合は別として)二つの世界の間を自由に行き来できるような場所となるわけではない。ベンヤミンのまなざしにおいては「パサージュ」がまさに「通過儀礼(trites de passages)」の場として映っていたように、²⁵異なる世界への入り口は、その「敷居」を越えた最初の瞬間にのみ感じられるものかもしれない。ちょうどベンヤミンが、少年期にシナゴーグでの礼拝に遅れたとき、取り残され遅れてしまったという絶望的な感情につづく、紐帯から解き放たれた快感によって「性の目覚め」を感じたと

きのように。²⁶

しかし、その境界が都市の中である空間的形態をとるとすれば、ベンヤミンにとって、何をもつてそれは「敷居」と呼ばれるような境界を越える形式の場となりうるのか。門、扉、敷居などは、社会的・文化的に意味分節された異なる空間間の境界を形成する形象として、もともとその機能にふさわしい空間的形態をとって都市のうちに存在している。そのため、なぜそれらの形象が「敷居」となりうるのかという問いは、自明のことがらに向けられた問いのようにしか見えないかもしれない。しかし、例えば玄関の呼び鈴が鳴るといことがひとつの「敷居」を形成し、²⁷さらにいえばそれがこの現象の世界の中から越え出てゆくものにつながっているとすれば、時間・空間を分割するそのベルの音は、この現象の世界の中で他の現象たちとどのように異なっているのだろうか。あるいは、ある事物が重層的な意味・イメージの結節点になるとすれば、その事物はどのような点においてこのわれわれの世界の中の他の事物と異なっていることになるのだろうか。

3 想起 (Eingedenken)

『ボードレールにおけるいくつかのモティーフについて』は、ベンヤミンが記憶をめぐる理論についてもっとも集中的に取り上げたテキストの一つであるが、ここで現れる「想起 (Eingedenken)」²⁸ という特殊な概念は、アレゴリーの理論連関を通じて、密やかに「敷居」の理論連関につながっている。『いくつかのモティーフ』は、ボードレールの『悪の華』が、それまでの抒情詩受容におけるものとはまったく変化した読者の経験の構造、つまり「大工業時代の不毛で眩惑的な経験」²⁹ に対応したものであるとい

う前提のもとに、『悪の華』をそういつた新たな経験の構造（「ショック体験」）において成立した抒情詩として分析していく。³⁰ しかし、こういった論の展開を基本的にもちつつも、『いくつかのモティーフ』は、「ショック体験」に設置される「伝統」や「経験」³¹ の連関が、単に乗り越えられるべきものとして片付けられてしまっているのではなく、むしろ「ショック体験」に対する補完的な要素として、『悪の華』での詩人の経験のうちにともに組み込まれていくという側面ももっている。この側面、つまり「伝統」「経験」の連関が『悪の華』のうちに組み込まれていくことに関わっているのが、Eingedenken である。ベンヤミンは『悪の華』の最初の部分をなす「憂鬱と理想 (Spleen et idéal)」という標題について、「理想は想起 (Eingedenken) の力を授け、それに対し憂鬱は秒の群れを招集する」³² という解釈を与えているが、それはまさに右に述べたような「経験」と「ショック体験」の対置的な関係に対応している。

『悪の華』を構成するとされるこれら二つの要素のうち、「経験」「想起 (Eingedenken)」に関わるものをベンヤミンは「万物照応」^{コレスポンダンス}と関連づけている。「万物照応」^{コレスポンダンス} について触れている箇所ではベンヤミンが特に強調していることはまず、いわば原初的な自然と言葉の中でさまざまな感覚が相互に影響あうものとして描かれた「万物照応」^{コレスポンダンス} が、「礼拝的 (kultisch)」な要素を含むものであること、そして「体験」ではなく「伝統」の領域に結びつく「経験」の概念に関わるということである。（このことは、ベンヤミンの概念配置以前に、そのようなものとして理解することができだろう。）ボードレールのソネット〈「万物照応」^{コレスポンダンス}〉のうち最初の八行をテキストのうちに引用した後、ベンヤミンは次のように続ける。「ボードレールが万物照応^{コレスポンダンス}ということで考えていたのは、危機に対して確固たるものであ

うとする、ひとつの経験であつたと言つてよい。この経験は、礼拝的なものの領域においてのみ存在しうる。」³³ ここで言及されている「危機」とは、従来の抒情詩がそれによつて存立の基盤を失つてゆくことになつた「大工業時代」、「群集」の時代の状況、ボードレーが「近代人としてその証人となつた崩壊」(U, 638)であるであるが、「万物照応」^{コレスポンダンス}は、そのような「近代」の「体験」を前にして、それとは反対に深く「伝統」と「経験」の領域、そしてまた「礼拝的」な領域に根ざしたものと位置づけられている。ちなみに、『いくつかのモティーフ』における「経験」と「体験」という対概念は、『複製技術時代の芸術作品』における「アウラ」の連関と非アウラの断片性(「モニタージュ」という対置関係に重なり合つており、いうまでもなく「礼拝的」という言葉はその連関にもつながっている。複製技術論は、基本的には「技術的複製可能性の時代」における芸術と知覚のあり方に焦点を定めながらも、「アウラ」を単に過去のものとして切り捨てるのではなく、むしろ「アウラ」への強い想いをつねに見え隠れさせている。それとちやうど同じように、『いくつかのモティーフ』でも、基本的には「ショック体験」によつて成立するような新しい抒情詩のあり方を示しながらも、それを一方とする両極が——「憂鬱と理想」^{スクリュー}という標題を自分自身の概念配置の場に組み替へることによつて——ボードレーの世界を構成していることをベンヤミンは強調しているのである。

「万物照応」^{コレスポンダンス}という詩的体験が「アウラ」の連関に結びつくものであるということとは理解されやすい事柄であるにせよ、しかしそれがなぜ「想起(Eingedenken)」と結びつくのか。このことはベンヤミンの歴史や時間をめぐる思考と関わっている。ベンヤミンは、「ボードレーにおいて時は奇妙な仕方では分割されており、ただ少数の特異な日々のみが姿を現すのです。

それは重要な意味をもつ日々です」というブルーストの言葉を引用した後、³⁴ 次のように続けている。「この重要な意味をもつ日々(Bedeutende Tage)というのは、ジュヴェールの言葉で言えば、完成する時の日々である。それは想起(Eingedenken)の日々である。そこにはいかなる体験のしるしもない。この日々は、その他の日々と結びついてはいない。むしろ時から突出している。それらの日々の内容をなすものを、ボードレーは万物照応^{コレスポンダンス}という概念に定着した。この概念は〈現代の美〉の概念とじかに隣り合っている。」³⁵ 『歴史の概念について』での「均質で空虚な時間」や「歴史の連続」への批判によつて知られているように、ベンヤミンはこの現象の世界における単なる時間の流れ、そしてその意味での歴史(「純粋な歴史」)のうちに何の救済の可能性も見えていない。救済への「跳躍」の可能性を秘めているのは、この単なる時間の流れのうちに存在しながらも、いわば時間・歴史を一点に凝縮したかのような瞬間(「現在時(Jetztzeit)」や空間的形象(「自然史」)である。ベンヤミンがブルーストの言葉において反応した「重要な意味をもつ日々」、そしてそれを言い換えた「想起(Eingedenken)」の「日々」とは、まさにそのような歴史・時間が凝縮された瞬間である。ボードレーにおいて「時は奇妙な仕方では分割されて」いるというブルーストの言葉に対して、ベンヤミンが特別な注意を向ける場合、彼が意図しているのは、ある時間の流れを単に切り分けるということでは決してなく、単なる時間の進行の中で、例えば(ブルーストが言及しているように)「もしも、ある宵」という詩の言葉となつて現れ出てくるような「重要な意味をもつ(Bedeutend)」瞬間、他の均質に流れる時間から突出して存在する瞬間があるということである。「想起(Eingedenken)」とは、こういった単なる時間の流れ、「純粋な歴史」において突出した特別な瞬間として存在する

「重要な意味をもつ日々」が、現象の世界、歴史の世界となる以前の理念の世界、神の世界を指し示すことそのものと考えることができらるだろう。「万物照応は想起(Eingedenken)のデータである。それは歴史的(historisch)なデータではなく、前史(Vorgeschichte)のデータである。」³⁶ 時間の流れやある展開においては過去のもの、それ以前の事象へと立ち帰る行為としての「想起(Eingedenken)」によつて想起起こされているもの(「データ」、「それらの日々」の内容をなすもの)は、「万物照応」という詩的体験のなかで感じ取られたいわば原初的な自然と言葉の世界である。しかし、それはこの単なる時間の流れの中の世界、「歴史的(historisch)」な世界におけるある特定の過去ではなく、まさに「歴史」の「前」にある世界である。しかし、「想起(Eingedenken)」はただ単にそういった根源を想起こす行為であるだけではなく、そのような根源を指し示すものとして歴史の世界のうちに突出して存在する瞬間という断片、あるいは「歴史哲学テーゼ」の表現によるならば、「歴史の連続を打ち砕いて取り出した」ような「現時(Jetztzeit)」³⁷の断片を引用し、——「後史」となるものへと——新たに構成する歴史の行為なのである。だからこそ、ベンヤミンにとつて「歴史は構成の対象」であり、そしてその意味において、「重要な意味をもつ日々」が「完成する日々」と言い換えられているのである。

こういった「前史」を「想起」するモチーフを、ベンヤミンは〈万物照応〉と並んで〈前世の生〉と題されたソネットのうちにも見ている。このソネットのほうがその題名自体によつてさらにはつきりと「想起」の対象を指し示しているかもしれない。「祝祭日を重大で意味深いものにするのは、前世の生との出会いである。」祝祭日もまちがいなくある伝統の連関を指し示すものであるが、これも暦の中で他の日々とは異なつた「重

要な意味をもつ日々」であり、その意味で歴史の構成の対象となる。「歴史の連続性を打ち砕いてこじ開けようとする意識は、行動の瞬間にある革命的な階級に特有のものである。フランス大革命は新しい暦を導入した。一つの暦が始まるその最初の一日は、歴史の低速度撮影という意味合いを担っている。そして、祝祭の日——それは想起(Eingedenken)の日にほかならない——として繰り返し回歸するものも、根本的には、これと同じ日なのだ。」³⁸「暦」は、一年の時間の流れを均質に分ける思考につながっているようにも見える。しかし、ベンヤミンにとつて(時間を均質に分ける「時計」に対して)暦はむしろ「重要な意味をもつ日々」が現れる場なのである。「暦は、ヨーロッパでは百年来というものの、もはやどんなかすかな痕跡すら感じさせることもないかに見えるある歴史意識の、その記念碑なのである。」

先の引用の中でもう一つ興味深いのは、「歴史の低速度撮影」への言及であるが、このこともまさに「重要な意味をもつ日々」としての「想起(Eingedenken)の日々」の特質にかかわっている。低速度撮影を行つたフィルムを映写すると、実際の時間の流れよりも速い速度で人物が動き、事物が変転してゆくが、このタイムスパンをきわめて長いものにするならば、そこでは歴史の推移がきわめて短い時間のうちに凝縮されているかのように感じるようになるだろう。『パサージュ論』には次のようなメモが残されている。「パリの市街地図から一本の刺激的な映画を作り出すことができるのではあるまいか。パリのさまざまな姿をその時間的な順序に従つて展開していくことによつて、街路や目抜き通りやパサージュや広場のここ数世紀における動きを三〇分という時間に凝縮することによつてそれができのではあるまいか。それに、遊歩者が行っていることも、まさにこれ

以外のなにものでもないのである。」³⁹ 単なる時間の流れの中に「重要な意味をもつ日々」や「現在時 (Jetztzeit)」として存在する特別な瞬間は、ちょうど「自然史」が「歴史」という時間性の「自然」という空間性への凝縮であるように、歴史の時間の流れが一点に凝縮した瞬間である。このように考えるとき、時間の流れの中に突出して存在する「重要な意味をもつ日々」とならんで、この歴史の世界の単なる空間の広がりの中に、いわば「重要な意味をもつ場所 (bedeutende Orte)」として存在する空間的形象を考へることもできるだろう。それがまさに「自然史」としてこの世界のうちに存在するアレゴリー的形象である。ベンヤミンにとっての「敷居」とは、彼の歴史主義批判における表現を転用するならば、いわば「均質で空虚な空間」のうちに、つまり「空間の連続」によって特徴づけられる場のうちに存在する「重要な意味をもつ場所」の一つであるともいつてよいだろう。

とはいえ、われわれははじめからこの空間を均質なものとしてとらえていたわけではなく、むしろ時間の流れにおける「暦」と同様に、もともと「重要な意味をもつ」ものによって世界をとらえていたといったほうがよいかもしれない。「時計」によって時間を均質な流れとして等分に計測する技術が進展し、それによってわれわれの思考のあり方がますます「時間の強迫観念」⁴⁰ によって規定されていったと同じように、「地図」における空間表現も、人間の自然な空間表象に従ったもの(表象された距離・方向による絵地図)から、厳密に数値化され、例えば緯度と経度によってあらゆる地点を等質に指し示すことのできるシステムへと転換してゆくことにより、われわれが世界をどのように思い描くかが大きく変貌してきた。ベンヤミンが『第二帝政期のパリ』や『パサージュ論』でも言及している、パリの番号制住所表記の導入もこういった世界把握の転換の一端を示してい

る。ベンヤミンは『ドイツ悲劇の根源』で概念的分節化に基づく哲学的思考を批判し、アレゴリーとして根源を指し示しつつ非連続的に存在する断片の構成という思考のあり方を方法論的に提起しているが、彼がベルリンやパリなどの都市を描く際に試みている歴史および空間の叙述のあり方は、まさにそういったアレゴリーの思考の圏内にある。

「憂鬱と理想」という標題のうちにベンヤミンが読み取ったボードレールの『悪の華』の二つの構成要素のうち、これまで「理想」に関係づけられた「想起 (Eingedenken)」のコンテクストのみを追ってきた。しかし、『悪の華』の基本的な方向を規定しているのはもちろんそういったアウラの連関ではなく、反対に「アウラの凋落」、「ショック体験」によって特徴づけられるような「現代の美」の連関、「理想」と対置される「憂鬱」の連関である。⁴¹ 「秒の群れを招集する」憂鬱とは、時計によって刻まれる均質な時間のなかに、つまりこの世の生のうちにとらわれているという慰めのなさ起因するものである。つまり「理想」が、この時間性の支配する世界の中で、いわば時間が凝縮した「重要な意味をもつ時間」・「重要な意味をもつ場所」において、「想起 (Eingedenken)」によって指し示されるものであるのに対して、「憂鬱」はこの世界の時間性そのものにかかわっているといえる。だからこそ、「ボードレールが〈憂鬱〉と〈前世の生〉において、真の歴史的経験の引き裂かれた二つの部分を手にしているとすれば」⁴² ということばによって、「憂鬱」と「理想」のあいだの両極的な時間性のあり方が言い表されることになるのである。

ところが、このように「憂鬱と理想」は本来対極的な関係であるにもかかわらず、ベンヤミンは「憂鬱」を次のように位置づけている。「憂鬱においては時間が物化される。一分二分が人間を雪片のように被つてゆく。この

時間は、無意思的記憶の時間と同様、歴史を持たない。しかし憂鬱スプリンにおいては時間感覚が不自然に鋭敏になる。一秒ごとに、そのショックを受け止めるために、意識が動員される。／時間の計算は持続性よりも均等性を重んじるが、それでもやはり自分の中に異質で目立つ断片を残しておくずにはいられない。」⁴³ つまり、「憂鬱スプリン」においても「想起(Eingedenken)」の日々」と同様に、秒を刻んでゆく均質な時間のなかで「物化され」、「雪片」のように堆積し、「異質で目立つ断片」となるような、時間の空間的形象への凝縮が生じてゆくことである。この物化された時間は、無時間的な「理想」と結びついている「無意思的記憶の時間」と同じように、均質な時間の流れの中に存在しつつも、いわば凝固することによって流れなくなってしまった(「歴史を持たない(geschichtslos)」時間である。そのような時間性が空間化した形象とは、ベンヤミンにとって、歴史の世界のうちに「自然史」として存在するアレゴリーにはかならない。ということとは、「憂鬱スプリン」の中で時間の流れから析出したものは、「想起の日々」として、「重要な意味をもつ日々」として、時間の流れから突出したものと同一なのだろうか。少なくともベンヤミンの把握に従うかぎり、〈憂鬱スプリン〉や〈空虚を好む心〉と〈万物照応コレスポンダンス〉や〈前世の生〉が、対照的な性格を示していることは明らかである。このように対照的な詩のうちに、時間が凝縮した空間的・時間的形象という特質が同じように位置づけられてゆくことになるのは、アレゴリーがもともと有している両極性に由来する。アレゴリーは一方で、それ自体「根源」、「前史」を指し示すものとして、この歴史の世界の中で救済の可能性を秘めた形象となつて存在している。しかし他方では、墮罪によつて神の世界からこの歴史の世界へと放逐され、あくまでも罪の連関に囚われた形象でもある。「憂鬱スプリンと理想」はつまり、この歴史の世界と理

念の世界の対置関係を指し示すとともに、アレゴリーの両極的な位置づけの表現ともなっているということが出来るだろう。

この二つの側面は、互いを前提としつつ、ベンヤミンのテキストの中でさまざまなヴァリエーションとなつて姿を現している。ボードレー論の連関において「憂鬱スプリン」が、例えばブランキやニーチェにおける永遠回帰のテーマにかわりながら、「新しいもの」であり、かつ「つねに同じもの」である「商品」の世界を扱うことによつて、このわれわれの世界——歴史の世界、現象の世界、罪の連関にある世界——に焦点を当てているのに対して、「理想」という言葉をとつてここで現れたもう一つの要素は、そういった歴史の「前」の根源的な世界につながつてゆくことによつて、この歴史の世界から救済された、歴史の「後」の神の世界をも指し示している。「想起(Eingedenken)」というきわめて特殊な言葉は、それが用いられるコンテキスト(物語論、プルーストの記憶論、歴史概念等)によつてさまざまな色合いを帯びることになるが、この概念を根本的に規定しているのは——物語論や記憶論の異なるコンテキストにおいても「想起(Eingedenken)」の連関で「礼拝(Kult)」や「祝祭日」が共通して言及されているように——なによりもこれが根源を指し示していることである。しかしながら、そのことを前提としつつも、『歴史の概念について』では「想起(Eingedenken)」におけるアクセントは、むしろ「後史」へと向かう救済の連関に置かれているように見える。

時間がその胎内に何を宿しているのかを時間から聞きだした占師たちは、間違はなく、時間を均質なものとしても空虚なものとしても経験してはいなかった。このことをありありと脳裡に思い描ける者はおそ

らく、過ぎ去った時間が想起 (Eingedenken) のなかでどのように経験されたかについても、はつきりとわかることだろう。つまり、まったく同じようにである。周知のように、未来を探ることはユダヤ人には禁じられていた。律法と祈禱は、その代わりに彼らに想起 (Eingedenken) を教えている。占師に予言を求める人びとが囚われている未来の魔力から、想起はユダヤ人を解放した。しかしそれだからといって、ユダヤ人にとって未来が、均質で空虚な時間になったわけではやはりなかった。というのも、未来のどの瞬間も、メシアがそれを潜り抜けてやつてくる可能性のある小さな門だったのだ。(補遺B)⁴⁴

シヨールムはこのテーゼに言及する際に、ベンヤミンの「メシア的理念」がエルンスト・ブロッホに由来すると考えることほど誤ったことはないと述べながら、この「メシア的理念」と並ぶユダヤ的カテゴリーとして「想起 (Eingedenken) の理念」をあげている。⁴⁵ ブロッホからの影響を否定するシヨールムの言葉が「想起 (Eingedenken)」までも念頭に置いたものであるかはともかくとして、ベンヤミンにおけるこの概念は明らかに、過去のものの中に潜む未来を指し示す力であり、かつ人間的なものと神的なものとの神秘的合一の場でもあるブロッホの「想起 (Eingedenken)」の概念ときわめて密接な関係にあるといえるだろう。⁴⁶ ベンヤミンは『パサージュ論』の初期の草稿の中で「目覚め」を「想起 (Eingedenken) の弁証法的、コペルニクスの転換」と位置づける言葉の後にブロッホの名を記しているが、⁴⁷ その「コペルニクスの転換」についてベンヤミンは次のように説明している『歴史を見るにあたってのコペルニクスの転換とはこうである。つまり、これまで「既在」 (das »Gewesene«) は固定点とみなされ、現在は、手探りしながら

ら認識をこの固定点へと導こうと努めているとみなされてきた。いまやこの関係は逆転され、既在が弁証法的転換の場に、覚醒した意識の突然の出現の場になるべきなのである。政治が歴史に対する優位をもつようになる。さまざまな事実なことからは、たつたいまわれわれにふりかかったものとなる。そして、その事実的なものを確認することは想起 (Erinnerung) の仕事である。実際、目覚めとは、こうした想起 (Erinnern) のもつとも模範的なケース、つまり、われわれがもつとも身近なもの、もつとも月並みなもの、もつとも自明なものを想起する (erinnern) ことに成功するよきなケースである。」⁴⁸ かつては Erinnerung と Eingedenken は実質的にほぼ同じ意味を持つものとして用いられていたが (これについては後で再びふれる)、とりあえずそのことを前提としていえば、ここでの「コペルニクスの転換」は二つの事柄をさしているといえるだろう。一つは、過去のある出来事(「既在」)はこれまで変わることのない事実としてとらえられ、われわれの認識は過去の事実に遡ることしかなかったのに対して、新しい歴史意識においては、その過去の出来事はそのような「固定点」ではなく、むしろ認識が転換する場となるということ、そしてもうひとつは、現在のわれわれの認識は過去に向かうのではなく、その出来事がとらえられている今現在という時点で、その出来事において認識の転換が起こることによって、われわれの認識はむしろ未来へと向かうことになるということである。「過ぎ去ったことがらを歴史的なものとして明確に言表するということとは、それを(実際にあつた通りに)認識することではなく、危機の瞬間にひらめくような想起 (Erinnerung) を捉えることを意味する」⁴⁹ という「歴史哲学テーゼ」の中の二節は、この意味において理解することができるだろう。

しかしこれらの箇所では、Erinnerung と Eingedenken がしばしばあまり一貫性のないまま用いられているように見えることが、われわれ読者を混乱させる。例えば、「コペルニクスの転換」を説明するテキストに続くパサージュ論の断片には、「既在を夢の想起 (Trauererinnerung) において経験すること! —— ということはつまり、想起 (Erinnerung) と目覚めはきわめて密接な関係にある。すなわち、目覚めは想起 (Eingedenken) の弁証法的コペルニクスの転換なのである」⁵⁰ という表現も見られるが、ここでも二つの言葉はほとんど言い換えのように用いられている。このことはおそらく次のように考えることができるのではないだろうか。ベンヤミンの思考がいかに神学、理念論、歴史哲学さらにはマルクス主義の理論的バックグラウンドによって支えられたものであれ、彼が直接の対象として取り上げているのは、『パサージュ論』にせよ、ベルリンを語るテキストにせよ、この世界の中のごく日常的な事物である。Erinnerung というごく日常的な言葉は、まずそのような日常的な経験を指し示している。この Erinnerung は、過去のある出来事を思い出す行為そのものであるとともに、また思い出された内容 (記憶) でもある。そのような記憶としての Erinnerung は、過去の出来事を思い出すという行為によって獲得することのできるものであるが、そのようにして手にした Erinnerung は、現在のうちにあるわれわれにとってある時間的な流れが凝縮された像、「それが認識可能な〈いま〉、稲妻のようにひらめく過去の像」⁵¹ として存在する。「夢の想起 (Trauererinnerung)」とは「既在」と同様に、現在のうちにあるわれわれが手にしている像なのである。その像においてある認識の転換が起こるとき、過去に生じた出来事は、「たつたいまわれわれにふりかかったもの」として、現在のわれわれにとって新たな様相を呈する。こういった意味にお

いて、Erinnerung も転換を遂げた認識によって未来を志向する特質を持つことになるのだが、基本的には日常的な行為として過去を「思い出すこと」にアクセントが置かれているといえるだろう。またそれとともに、「思い出されたもの」がこの日常の時間の世界のうちに凝縮した像として析出することでもある。

それに対して、Eingedenken は単なる日常的な過去の出来事ではなく——「祝祭日」がベンヤミンにとってそのようなものとして考えられていたように——ある根源的な事態に遡及する。また、Eingedenken は思い出される内容そのものではなく、ある「重要な意味をもつ」日々や空間的形象が指し示す「根源」につながるうとする行為である。ベンヤミンにとってそのような「過ぎ去ったものへの虎の跳躍」⁵² は、「歴史の連続を打ち砕いて取り出す」こと、つまりこの歴史の世界からの救済となるがゆえに、Eingedenken という言葉において (例えば先に引用した『歴史の概念について』のテーゼ補遺 B に見られるように)「前史」の連関にある「根源」よりもむしろ「後史」へといたるための「救済」にアクセントが置かれることにもなりうる。『いくつかのモティーフ』では、この Eingedenken の概念はまずブルーストの記憶理論との連関において現れるため、彼の「無意思的記憶」と結びつけて理解されるかもしれない。しかし、「無意思的」であるという記憶の様式そのものが Eingedenken を規定しているのではない。「無意思的」であることが問題となるのは、そのような記憶が——「万物照応」における体験や「前世の生」の記憶がまさにそうであるように——ある無時間的な「根源」の領域に関わるものであるからだ。先に引用した「歴史哲学テーゼ」補遺 B の異稿で、ベンヤミンは Eingedenken を「歴史についての神学的観念の精髓」⁵³ と位置づけているが、彼にとって

記憶をめぐる連関、それとともに都市を語る連関の根幹にあるのは、あくまでもユダヤ神学的な歴史哲学なのである。

そういった「根源」や「救済」の連関は、繰り返すことになるが、例えば「われわれがもつとも身近なもの、もつとも月並みなもの、もつとも自明なものを想起すること」といつたきわめて日常的なできごとの中に宿されている。そうした想起のもつとも模範的なケースとされる「目覚め」や、その前段階としての「眠り」や「夢」も、比喩であると同時にそのような日常的な出来事そのものでもある。同じように、きわめて日常的な都市の中の事物のうちに、「根源」へと遡及することによって救済を指し示す連関が宿されている。異なる二つの世界の境界としての「敷居」は、事実的なもの、現象的なものと神学的なもの、歴史哲学的なものとが重なり合う場であると同時に、「メシアがそれを潜り抜けてやつてくる可能性のある小さな門」として、都市の中の空間をそれと知られることなく満たしている。⁵⁴ 過ぎ去ったものが現在のうちに凝固した夢の像、記憶の像——意志的に甦らせたものの、そして意識のはるか奥底である無時間的なものにつながっているもの——は、こういった小さな門である。記憶の像となつてあるいはその物質性そのものによつて過去の時間を現在のうちに宿している都市の形象たちも、こういった小さな門である。都市の中を歩くということは、これらの門を通じてつながっている異なる世界をかすかに予感しつつ、それらの世界が織りなすテクスチュアの中に入り込んでゆくことである。

- 1 「方通行路」、『ベンヤミン・コレクション3』ちくま学芸文庫、一九九七年、二九頁。(Walter Benjamin, *Gesammelte Schriften*, Band IV, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1991, p. 90. 以後、この著作集からの引用はローマ数字による巻数とアラビア数字によるページ数で示す。)
- 2 山口裕之『ベンヤミンのアレゴリーの思考』人文書院、二〇〇三年参照。
- 3 『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』、『ベンヤミン著作集6 ボードレール』晶文社、一九〇年、三九頁(1, 59)。(二部訳を変更)
- 4 『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』、『ベンヤミン著作集6 ボードレール』二五—二五七頁(1, 602-604) 参照。
- 5 「方通行路」、『ベンヤミン・コレクション3』二—三頁(IV, 86)。
- 6 「方通行路」、『ベンヤミン・コレクション3』一九頁(IV, 85)、『二五—二五四頁(IV, 102-104) 参照。
- 7 「敷居」をめぐる思考連関については、とりわけヴィンフリート・メニングハウス『敷居学 (Winfried Menninghaus, *Schwelkenkunde*, Walter Benjamin's Passage des Myths, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1986, pp. 26-58) 参照。
- 8 ベンヤミン『パサージュ論』岩波書店、一九九三年、一九—一九五頁(V, 150-152) 参照。
- 9 『パサージュ論』一六九—一七〇頁(V, 139 [C2a.3])。(一部訳を変更)
- 10 『パサージュ論』一七三頁(V, 141 [C3.3])。(一部訳を変更)
- 11 『パサージュ論』一六三頁(V, 135 [C1a.2])。(一部訳を変更)
- 12 『ボードレールにおける第二帝政期のパリ』での「地下的・冥界的 (chthonisch)」という語の概念連関については、山口『ベンヤミンのアレゴリーの思考』二六—二八頁参照。
- 13 『パサージュ論』一七二頁(V, 140 [C2a.11])。(一部訳を変更)
- 14 メニングハウス『敷居学』六八頁。(Menninghaus, *Schwelkenkunde*, p. 43.)
- 15 「シュルレアリスム」、『ベンヤミン・コレクション』四九五頁(II, 296)。
- 16 「カール・クラウス」、『ベンヤミン・コレクション』五三三頁(II, 348)。
- 17 メニングハウス『敷居学』四二—五〇頁(Menninghaus, *Schwelkenkunde*, S.29-33.) 参照。
- 18 「方通行路」、『ベンヤミン・コレクション3』二二頁(IV, 138)。(一部訳を変更)
- 19 山口『ベンヤミンのアレゴリーの思考』二四—二五頁参照。
- 20 V, 147. 邦訳『パサージュ論』一八四頁では「境界線論」という訳語が使われている。そもそも「敷居」という日本語は“Schwelle”に対して比喩的な転用度が高らかに低く、建物の敷居の連想から離れることができないため、これに対して「学」という言葉をつけることは、おそらくドイツ語における以上に奇異な印象を与えることになると思われる。しかし、「敷居 (Schwelle)」とフタタムの「貫性を重視する立場から」(Menninghaus, *Schwelkenkunde*

の翻訳者である伊藤秀一氏の表現を踏襲して、ここでも「敷居学」という言葉を用いることにしたい。

21 『「パサージュ論」』一八四頁(V, 147[C5a.2])。

22 「ボードレールにおける第二帝政期のパリ」、『ベンヤミン著作集6 ボードレール』二二—三四頁(L, 585-586) 参照。「近代を最終的に、もつとも内奥から古典古代に結びぎざすのは、このかよわさなのだ。」

23 山口『ベンヤミンのアレゴリー的思考』二二—二三頁、メニングハウス『敷居学』九—九三頁(Menninghaus, *Schwellenkunde*, S.54-55.) 参照。メニングハウスは、「革命的解放およびメシア的な行為(救済)の時間構造に関する彼「ベンヤミン」の哲学」と「従来の歴史哲学に特徴的な三段階説」との違いを、後者が幸福な原始状態から離反した長い否定性の期間から「漸進的進歩」によって未来のユートピアに達すると見ているのに対し、ベンヤミンにおいてはその否定性の時代は単なる「衰亡の時代」(V, 57)ではなく、ある革命的な「虎の跳躍」(I, 70)によって乗り越えられるということ、またそれは事実上いつでも可能であるということのうちに見ている。ベンヤミンの基本的な思考のあり方に対して「三段階的」という言葉をもちいる場合、こういった差異が念頭に置かれるのはもちろんのこと、とりわけ本文で述べたような三段階的思考のいくつかの系列が複合的に重なり合ったものであることが意図されている。

24 「言語一般および人間の言語について」、『ベンヤミン・コレクション』一九頁(L, 153)。

25 「門は通過儀礼と関連している。」(『「パサージュ論」』六四頁(V, 521[L5.1]) 「これらの門——パサージュの入り口——は、敷居だ。」(『「パサージュ論」』一七四頁(V, 142[C3.6])

メニングハウス『敷居学』九頁(Menninghaus, *Schwellenkunde*, p. 8) 参照。

26 「一九〇〇年頃のベルリンの幼年時代」、『ベンヤミン・コレクション』六〇〇—六〇二頁(V, 251) 参照。

27 「ベルというものは専制的な脅威をもつて住まいの上に君臨するものだが、この専制的な脅威にしても同様に、敷居の魔力からその威力を手に入れる。」(『「パサージュ論」』一七四頁(V, 141[C3.5])

28 *Eingedenken* という言葉に対してどのような日本語を用いるかということは、おそらく訳語の選択に関して日本のベンヤミン(あるいはブロッホ、ショーレム、アドルノ)研究者が最も頭を悩ませる問題の一つである。*Eingedenken* は後に述べるような意味である程度 *anamnesis* につながる概念であるので、ここではとりあえず「想起」という言葉を当てることにしたが、原語の持つ力があまりにも強力であるため、その訳語にもとのドイツ語を添えている。また *Erinnerung* は「ブルーストの」意思的記憶」に関わる概念として用いられる場合には「回想」と訳してもよいだろうが、本稿では *Eingedenken* とはほぼ同じ意味で用い

られた概念のみが取り上げられている。その場合には *Eingedenken* と同じく「想起」と訳し、ドイツ語を付記した。また、*Gedächtnis* はブルーストおよびフロイトの連関から「記憶」の語を用いることにした。それとともに(ベンヤミンの場合もそうであるが)これらすべての上位概念としても「記憶」という言葉を用いている。

Erinnerung や *Gedächtnis*、そして *Eingedenken* とどうきわめて特殊な言葉によってベンヤミンがどのような概念上の切り分けを行っていたのかということについては、彼が異なるテクスト間で厳密な二貫性を持つてこれらのタームを用いていないように見えるため、解釈に混乱を生じさせている。しかし、『いくつかのモティーフ』では、比較的概念上の二貫性が見られ、また「想起(*Eingedenken*)」の概念が決定的に重要な役割を果たしているの、こころは主にこのテクストにおける概念の用い方に沿って論を進めてゆく。ちなみに、*Benjamins Begriffe* は「*Erinnern*」の項を担当)として Detlev Schötker は「ベンヤミンは、ブルーストとは異なり、おそらく *Eingedenken* の概念と結びつけることが可能であろう *Erinnern* の意識的形式を、無意識的形式に対して切り分けていなら、ことを理由に「*Erinnerung* と *Eingedenken* は区別されないとしよう立場をとっている」(Cf. Michael Oplitz, *Erdmud Wiszla* [Hrsg.], *Benjamins Begriffe*, Frankfurt a.M.: Suhrkamp, 2000, p. 260, Anm.1) しかし、それではベンヤミンが *Eingedenken* というきわめて特殊な語によって強調しようとした概念圏がまったく切り捨てられてしまうことになる。

29 「ボードレールにおけるいくつかのモティーフについて」、『ベンヤミン・コレクション』四二二頁(I, 609)。

30 「ボードレールにおけるいくつかのモティーフについて」での記憶をめぐる諸概念、および「体験」と「経験」の概念については、久保哲司「後期ベンヤミンにおける解釈の理論——ボードレール論注釈(2)および(3)」高知大学学術研究報告第三九巻人文科学分冊一九九〇年、三八三—三九四頁、および一九九一年、二八三—二九五頁において詳細な分析が試みられている。

31 ベンヤミンのテクストにおいて「経験」という言葉は「体験」と明確に対置され「伝統」「アウラ」の連関にある概念として用いられる場合と、その意味での「経験」と「体験」の上位概念として用いられる場合が混在していることに留意する必要がある。本稿でもベンヤミンのテクストと同じように「経験」という言葉をこの二つの意味で用いるが、「伝統」「アウラ」の連関における「経験」概念の場合には、つねに括弧に入れて表記することにした。

32 「ボードレールにおけるいくつかのモティーフについて」、『ベンヤミン・コレクション』四六四頁(I, 641)。

33 「ボードレールにおけるいくつかのモティーフについて」、『ベンヤミン・コレクション』四六二頁(L, 638)。同じ内容を次のような表現でも言い表している。「本質的に重要なのは、万物照応が、礼拝的(*kultisch*)な諸要素を内包する経験概念を定着するということである。」(同

書四六〇頁(1, 638))

34 めんやみんが “Die Zeit ist bei Baudelaire auf eine befremdende Art zerfällt; nur wenige Tage tun sich auf; es sind bedeutende. So versteht man, warum Wendungen wie “wenn eines Abends” und ähnliches bei ihm häufig sind.” (1, 637) と訳しているブルーストのテキストの原文は以下のようになっている。⁴⁵《Le monde de Baudelaire est un étrange sectionnement du temps où seuls de rares jours notables apparaissent; ce qui explique les fréquentes expressions telles que (Si quelque soir, etc.)(Marcel Proust, *Contre Sainte-Beuve*, Gallimard, 1971, p. 628.) このブルーストのものとテキストからの翻訳によって、とりわけ前半部分にいくつかのアクセントの置き換えが生じている。ドイツ語では主語が「時」とされることにより、「時」に焦点が当てられることになるが、それ以上に顕著であるのは、“bedeutend”とどう言葉である。“notable”が“bedeutend”と訳されることによって、その特別な「日々」が他の時間と区別されるのがより内面的な重要性によるものとなるということも指摘できるかもしれないが、何よりも重要であるのは、セリフロンによって独立した“es sind bedeutende”という言葉によって“bedeutende (Tage)”が決定的に強調されていることである。このアクセントの置き換えによって、これに続くめんやみんの論議が用意されることになるのである。

35 「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」『ベンヤミン・コレクション』四五九頁(1, 637-638)。(一部訳を変更)

36 「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」『ベンヤミン・コレクション』四六二頁(1, 639)。

37 「歴史の概念について」『ベンヤミン・コレクション』六五九頁(1, 701)。

38 「歴史の概念について」『ベンヤミン・コレクション』六六〇頁(1, 701)。

39 『パサージュ論』一六二頁(V, 135)。

40 「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」『ベンヤミン・コレクション』四五九頁(1, 637)。

41 先にあげた引用の中で「現代の美」の概念は、「^{コレスボンダンス}万物照応」の概念とじかに隣り合っていること述べられていた(註35の引用参照)。「現代の美」は「憂鬱(Spleen)」の連関にある概念として、「理想(ideal)」の連関にある「^{コレスボンダンス}万物照応」と両極をなしつつ、ボードレールの世界を構成する。「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」『ベンヤミン・コレクション』四六六頁(1, 643)。

43 「ボードレールにおけるいくつかのモチーフについて」『ベンヤミン・コレクション』四六五頁(1, 642)。

44 「歴史の概念について」『ベンヤミン・コレクション』六六四—六六五頁(1, 704)。(一部訳

を変更)

45 Cf. Gershom Scholem, *Walter Benjamin und sein Engel. Vierzehn Aufsätze und kleine Beiträge*. Herausgegeben von Rolf Tiedemann. Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1983, p. 33. (好村富士彦監訳『ベンヤミンの肖像』西田書店、一九八四年、四五—四六頁参照)

46 ブロッチとベンヤミンにおけるEingedenkenの概念の親近性に関しては、次の論文からきわめて大きな示唆を得た。古川千家「ブロッチとベンヤミン——作用史研究(上)——」『愛媛大学教養学部紀要第二号、一九八九年、一七六—一九二頁、「ブロッチとベンヤミン——作用史研究(下)——」愛媛大学法文学部論集人文科学編第三号、一九九七年、六五—九八頁、小田智敏「E・ブロッチとベンヤミン——Eingedenkenをめぐる」『ドイツ文学』日本独文学会編、二〇〇一年、第二〇六号、二二—二三頁。

47 V. 1006. [F0, 7] ちなみにこの草稿はほぼ同じ表現のまま[K1, 1](V, 490)に書き換えられているが(新たにブルーストにおけるEingedenkenへの言及も加わる)、そこではブロッチの名前は削除されている。本文で次に言及している「コペルニクスの転換」の説明があるのは、この書き換えられた[K1, 2]に続く断片の中ということになる。

48 『パサージュ論』五一六頁(V, 490-491 [K1, 2])。

49 「ベンヤミン・コレクション」六四九頁(1, 695)。(一部訳を変更)

50 『パサージュ論』六—七頁(V, 491 [K1, 3])。(一部訳を変更)

51 1, 1243. (『歴史の概念について』の異稿。ほぼ同じ表現がテーゼVに見られる。)

52 「歴史の概念について」『ベンヤミン・コレクション』六五九頁(1, 701)。

53 1, 1252.

54 「歴史哲学テーゼ」補遺Bの異稿には、「その扉が動いている箇所の蝶番が、想起(Eingedenken)である」という興味深い記述が見られる(1, 1252)。